

平成十八年度鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウム・パネルディスカッションの部

雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	12
ページ	33-41
発行年	2007-04
URL	http://doi.org/10.24791/00000429



パネルディスカッションの部

司会 最初に各先生に発表の補足や他の先生への感想を述べていただきます。その後、先生方の間でパネルディスカッションを行い、更に会場からの質疑応答をいたします。

矢島 補足いたします。瑩山禪師がアングリマールに関しておっしゃっていることを、ひとつだけ見つけました。レジュメに掲げた『報恩録・上巻』第四十七です。『報恩録』は禪の祖録の中からテーマを出し、解説したものです。ただし、一般にこの『報恩録』は瑩山禪師のご真撰とは見られていないようです。この撰述の真偽については、ご専門の宮地先生に伺いたいと思います。なかには全体を瑩山禪師に帰することはできないが、まるっきりの偽書ともいえないといっている人もいます。どうなのでしょう。

一つ修正点があるのですが、そこに「仏法の奇特」として難産を救った話が抽出されていると書きましたが、『報恩録』の解説部分をよく読むと、むしろ逆に仏法の奇特のようにとつてはいけません、という趣旨のようです。本則では難産で苦しんでいる女性をみて、どうしたらいいかを仏に訊くと、賢聖法（げんじょうほう）、つまり、阿羅漢に至る修行の道に入ってから、自分は殺生をしたことがないといいなさいといわれ、そのようにいったら無事出産し、母子とも平安であったとされています。これを解説して、殺生の経験がないという言をもつて、仏法の奇特で無事出産できたことをいってはいけません、ただ自然に分娩したことだとしているのは、真実語の力で難産の苦しみから解放されたというモチーフを見失っているように思われます。「鉢たたき」だと

もいつているのですが、その意味は私にはわかりません。

それから、関連しての質問ですが、『洞谷記』において「産生平安」という言葉で、瑩山禪師はとくに女性の安産を願っています。そこから考えると、本則そのものは瑩山禪師ご自身がどこからか引かれた可能性はあるかどうか。感想で結構ですが、教えてください。

もう一点、これは吉田先生にうかがいたいのですが、唯円房との対話の中にある「宿業にあらざるなし」という親鸞聖人の言葉です。これは、瑩山禪師の宿業観とは同一かということですか。

吉田 四つの『伝光録』における業・因果論の分類で、二つ目の「倫理道德的業・因果論」で、洞山悟本大師章に関連して補足します。母の引きとめを聞かずに洞山が出家し、母は恨んで死んだということですが。洞山が修行をしたその善根力により、切利天に昇ったと簡単に説明しましたが、『伝光録』はもっと具体的に表現しています。すなわち、「三合の米を修行僧のお粥にして供された」とあります。それによって母が切利天に昇ったとされています。お盆の盂蘭盆会の法要に纏わる話との関連、施食会、昔の施餓鬼会との関係、エピソードとしては中国で作られたものですが、要するに、洞山はお粥を修行僧に差し上げたことと記載されています。

三つ目の「輪廻転生」で、瑩山禪師のお言葉「予は昔、毘婆尸の時より羅漢果を證す。須弥山の北の雪山に止住す鳩婆羅樹神なり。頭は犬、身は鷄、腹と尾は蛇形にして四足の獸なり。云々」(『洞谷記』)といわれるのは、一の神秘的業・因果論そのままです。この類の話がたくさんあります。

同様の話は、洞谷山永光寺の寄進者・海野三郎信直の奥さんが、尼さん(祖忍尼)になって彼女は「建仁寺御座の時の御弟子明智婆夷の再来なり」、といわれています。明智婆夷は瑩山禪師の祖母です。比丘尼の熱心な信

心、永光寺の開基の奥さんになられた方です。その祖忍尼が明智婆夷の再来、生まれ変わりとして瑩山禪師は考えておられたのです。

「四、感夢、夢告、夢想…」ですが、達磨、弥勒、釈迦、十六羅漢の第八番目の羅漢、稻荷神、毘沙門、大黒天、招宝七郎大権修理菩薩など、八幡神も出てきますが、これらの方が夢に出てきてお告げをする。最初の達磨、弥勒、釈迦等々は、解釈に異論はありますが、お釈迦様以来、禅宗で伝えられている、達磨さんのお袈裟など、つまり、正しい禅の仏法を伝えられたという瑩山禪師の自覚が大事ですね。

それから、弥勒菩薩に連れて行かれて、兜率天トソツテンの内院に入って、不退転の自信を持っておられた心境、『大宝積経』をお釈迦様が夢の中で三解脱の法門を説くのを聞いて、正しく把握したといったような話。

それからいろんな神々、稻荷神、毘沙門、大黒天等々が登場します。寺院経営で修行僧に塩や醤油、野菜類が少なく逼迫していたところ、信者さんがいわば稻荷神、毘沙門天に代わってお布施されるようなことを示しているのです。お弟子が当時何人いたか知りませんが、そういうことを神様たちが保証するということを説いているのです。

これは瑩山禪師の深い配慮ですね。修行僧に対し心配なく修行できる、食べることは心配ないと伝えること。夢であっても現実との境で安心させるような心づかい。また、神仏の加護によって物心両面が自然と満たされていたと思うのです。瑩山禪師は現実と夢との区別は意図されない。当時の人々の夢に対する一種の信仰が前提にあったように思われます。

法然上人、親鸞聖人、明恵上人などもほぼ同じ時代でしたが、瑩山禪師と同じように夢を説いておられました。ちよつと、これらとの関係を言及できないのが気のこりです。

矢島先生から瑩山禪師と親鸞上人の宿業観の違いを問われました。親鸞聖人の『教行信証』を私が十分に把握し咀嚼しているかというところ、そうではありません。ただ、ひとついえることは、親鸞聖人の自称された「愚禿」、いわゆる宿業の意識、罪業意識というか、ユダヤ教やキリスト教の「原罪」意識に近い意識が親鸞聖人の自証にあるのではないかと漠然と思います。

瑩山禪師も深い自己凝視をされていますが、親鸞聖人ほどまでとはいえないにしても、ともかく、宮地先生の話にあったような当時の時代意識。正法・像法・末法と移り、今や末法の時代であるということを経験した上で、しかし、自分はそれに止まらない。性別、身分、職業に関わらず誰にでも人に会い接する。また檀家を仏のように大事にするところに向かう心、一つの使命感もあって、「大悲闡提之弘誓願」や「女人濟度」に向かつていったのではないかと思います。

宮地 矢島先生ご指摘の『報恩録』に関しては、先生もおっしゃっていたように、『報恩録』『十種勅問』『三根坐禪説』の三つは瑩山禪師が関わっていないというのが通説です。『報恩録』に関しては、臨濟禪の公案禪的ニュアンスが強いので、曹洞宗とは違うのではないかと人もいます。

瑩山禪師の場合は道元禪師以上に臨濟宗の祖師方と会っておられ、道元禪師は中国へ行き、仏教を深められたのですが、瑩山禪師は他宗派とのいわば他流試合の中で、教学を構築されていった部分があります。必ずしも臨濟的、曹洞的ということ、真撰、偽撰を分けるのは違う気がします。個人的には、『報恩録』に瑩山禪師がある程度は関わっていたと思います。矢島先生ご指摘の出産にまつわる部分とも関連してくるのですが、母親に関して瑩山禪師は『伝光録』をはじめ、深い愛情、慈悲心を示しておられるので、『報恩録』のようにはっきりと

終わるのは考え難いです。瑩山禅師の行状とのすり合わせの中で、『報恩録』を読む必要があるかもしれません。ただし、瑩山禅師の伝記は後人の創作のようなものもあり、解釈が難しいものもあります。全体像がつかめていないというのが現状であり、今後、瑩山禅師の行状を視野に入れながらの、文献の体系的な研究が必要です。

夢の件ですが、『大宝積経』について、道元禅師よりも瑩山禅師の方が絶えずご覧になっていたようで、出家菩薩はこうあるべき、在家はこうあるべきだという文章が多い経典だからかもしれません。瑩山禅師の行状から考えれば、在家者の位置づけがクローズアップされているという点で、瑩山禅師のご意志と経典のニュアンスが、そこで合致していると思います。坐睡するくらい『大宝積経』を読んでいたということから、やはりその内容にはシンパシーを感じられていたと思います。

発表の中で、天童珥和尚の眠っている状況が悟りの状況と同じだというのは、果たして医学的に同じなのかどうか。總持寺に私が修行僧で安居していたころに出版された、『禅と精神学』（講談社）でしたか、あの本のような研究が必要な気がします。

以前「坐禅は思考停止状態なのか」という論議もありましたが、現代の見地から、坐禅の意味の解明が必要でしょうし、瑩山禅師の『坐禅用心記』の中で説かれている、「禅病」についても考えていかねばならないと思います。

〈質 疑 応 答〉

司会 会場からご質問をいただきます。

会場 池谷です。總持寺の隣組です。この地に四百年住んでいます。八十歳なので、總持寺とは八十年間のお付き合いです。瑩山さんは隣組の親父さんという感じですが、もっと知りたいと思うのですが、曹洞宗では道元さんの本はあるのですが、瑩山さんの本はあまり見あたりません。今日はそういう意味で瑩山さんの側面を知ることができてありがたいと思います。

能登から鶴見に引越した経緯、永平寺との関係などをいう人がいますが、よくわかりません。日本人の心は仏教と儒教、武士道から形成されていると思います。そのような中で、瑩山禅師の日本の仏教史での位置づけを教えてください。

吉田 私ほどちらかというと、瑩山禅師よりも道元禅師のほうが専門です。昭和六十三年、總持寺で人権関係の問題で組織ができ、『伝光録』『洞谷記』その他を拝読した因縁で今日この場につながっています。

總持寺と永平寺の両大本山との間には、歴史的にいろいろな対立や葛藤がありました。それはさておき總持寺は石川県能登からこちら（鶴見）に移ったのはご承知の通り火事（明治三十一年四月）が原因でして、伽藍の大半を消失しました。また、それを契機に石川素道禅師が北陸から関東中央部に移転し、全国的に教えを拡張する

目的がありました。瑩山禪師は檀家を大事にし、弟子も大勢立派に育てられました。永平寺の道元禪師は、宗旨の祖。入宋留学をされまして基礎、思想的教理を築きました。一方、懷奘禪師および義介禪師の後、瑩山禪師は「教団の祖」といわれています。全国各地でお弟子の各和尚さまがその土地に根ざした信仰、檀信徒の願い、祈りをすくい上げて教団の拡張に努力されました。道元禪師を中国の王朝式尊称で「高祖」と呼び、瑩山禪師を「太祖」と呼びます。

室町以降、二つの寺は特に財政面、修行者の数の面で一夜任職の配分、天皇のお墨付き（敕額・繪旨）の強調などの争いがあり、明治期に永平寺が総本山と称しようとして両山が拮抗しました。そうした中で時の政府の要人が、両大本山の融合・同等ということで和解を企り両山が現在に至っています。

浄土真宗は歴史的に、日本で一番大きい教団ですが、信長の時代に機械的に東西二つの本願寺に分けられてしまいました。曹洞宗はそんなふうにならず現在に至っています。

会場 總持寺の庵です。瑩山禪師は和合の心を大切にされた方と理解しています。僧侶同士の和合を同心和合といって、互いに心を同じくして切磋琢磨しなさいとお示しをされました。また、師檀和合、僧侶と在家も和合しなさいということ、私もわかります。在家同士の和合の心を瑩山禪師は説いておられたのか、それを示唆するものがあるなら教えてください。

宮地 在家同士になるかどうかかわからないですが、瑩山禪師はお弟子の峩山韶碩に能登の總持寺を譲るときに、十か条の亀鏡というものを託されています。その中の六番目に、男女、出家在家も関係なく諂曲の心、人を妬み、羨む心を持つと争いの元になるので持つてはいけない、とされていて、これらの心がすべての妨げだと説いてい

ます。

おそらく、瑩山禪師は檀家内の諍いを見たり聞いたりされたと思います。檀家同士、信徒同士の諍いをコメントされている具体例はないですが、そういうことがないようにと、弟子に思いを託されている部分があります。

会場 育英短大の佐藤です。資料にあるように古代の社会や鎌倉時代の男性中心の社会で、瑩山禪師が僧侶間の階層、出家在家、男女の区別も存在しない、制約のない純粋な人間観に基づく考え方を持たれたことを、素晴らしいと思います。

これは瑩山禪師の性格によるものなのか、時代の流れを厳しく見たうえでのものなのか。現在の曹洞宗になったのは瑩山禪師の尽力によるといわれていますが、曹洞宗のあり方に瑩山禪師のお考えが十分に受け継がれているのか、主観でもいいのでお聞かせください。と言いますのはまた、少子化問題があります。少子化に歯止めが効かないのは、国の政策が机上のプランであって、まったく歯止めが掛らない。実態を把握していないからだというような気がします。日本社会がまだ男性中心であるのが原因だと思います。瑩山禪師の人間観が少子化対策に強い示唆を与えてくれるのではないかと思えます。

宮地 瑩山禪師の性格だったのではないのでしょうか。撰述書のほとんどに母についての想いが出ています。幼少のころから植えつけられてきたことを生涯通された、と解釈するのが自然に思えます。瑩山禪師の伝記は江戸時代に関係者によって作られた観もありますが、それを差し引いても紹介した『洞谷記』にあるように、母への強い気持ちが表示されています。

二つ目ですが、『伝光録』をはじめとする瑩山禅師の教学的な研究は緒に着いたばかりです。全体像はまだ確立されていないといえます。その中で、瑩山禅師の教え等が表に出づらいわけで、今日のようなシンポジウムが多く開かれ、瑩山禅師研究の機運を盛り上げていかないと、全体像の把握は難しいと思います。

曹洞宗ではグリーンプランを進めています。瑩山禅師も永光寺の周りの松をむやみに切るな、と弟子に伝え、松が寺を守り緑が心を慰めてくれる、ともおっしゃっています。こうした言葉を宗門内に訴えていくべきだと思います。今後、瑩山禅師の思想が内外に認められるためにも、教学の体系化を早急に行うべきではないでしょうか。

司会 鶴見大学設立の背景は、瑩山禅師の『三大誓願』の中の「女人済度」にあります。教団が展開する中で、その力は非常に強かったと考えています。『洞谷記』では母は何度も出てきますが、父は出てきません。瑩山禅師のそうした性格が背景にあつて、教団を大きくしたと考えられます。

男女平等、女人救済が完成すれば、子どもを産みやすい環境も整います。安産の件ですが、安産祈願は十一面観音の信仰だったので、総持寺で信仰してもいいのではないかと個人的に思います。

以上、『伝光録』を中心にして瑩山禅師の人間観、思想、時代、特に「業・因果論」を通して問題点や今後の課題が見えてきたと思います。これを機会に瑩山禅師を改めて見直すきっかけになればと祈念します。

長時間、ありがとうございました。